

Edmund W. Vaz “Middle-Class Juvenile Delinquency”

——中流階級少年非行問題への探求——

井 垣 章 一

近年、「中流階級少年非行の増加」とか、「非行は、もはや貧困によって説明されない」とか、いろいろ論議されるようになった。しかし、その本格的な研究はまだ見当たらないようである。少年非行について数多くの書物が出ているアメリカにおいて、「中流階級少年非行」とそのものを題名にした本は、一九六七年発行のこの E. W. Vaz 編によるものを除いて私は知らない。だとすると本書は、この領域における貴重な存在ということになりそうであるが、これは一人または数人の研究者が、本書の発刊をめざしてがっつりといくくりあげたものでないことに、いささかの失望は禁じ得ない。

ここには、本書のためにあらたに書かれたものも二点あるが、他は “American Journal of Sociology” “Canadian Review of Sociology and Anthropology” “Social Problems” その他四種類の学術誌に掲載された論文、それに単行本からの一節や学会

発表のペーパーも含まれて、計十九点の論文が含まれている。そうしてこれらの論文は、本書を構成する四つの部分、「ユース・カルチャー」「社会経済的地位と少年非行」「中流階級非行のパターン」「中流階級少年非行理論」に分類、収録されるのである。それらは一つの大項目にまとめられている限りにおいて共通性を保持するものではあるが、一つ一つは独自のテーマと内容をもつ論文でもある。たとえば第一部では、少年非行問題究明のために、現代の青少年の行動や考え方について、すなわちユース・カルチャーというものを理解しなければならぬというのが主要テーマになっているが、ユース・カルチャー発生をレジャー文化とゆたかな社会という現代社会状況にその根源を求めようとする論文や、スポーツ、デート、性行動における青年固有の態度、行動についての研究報告があるかと思うと、同じアメリカ社会の中で、あるコミュニティにおいては、青年たちはすべて成人文化にスムーズ

に吸収されていく一貫した社会化過程の存在を証明するデータの提示が含まれていたりする。こうなると一つ一つ別々に論評する必要もあるようであり、しかし既発表のものばかりだからそうしても殆んど意味はないし、ちょっと紹介しにくい本である。編集者のねらいは、まだまだとまった研究のないこの分野において関連する諸研究をあつめ、今後の研究に刺激をあたえることであつた。ゆえに、ここでは、本書から全体として得られたもの、さらに考える点などについて書いてみるのが適当であろう。

### 中流階級少年非行の発生について

近年、中流階級少年非行が問題化されてきたのは、第一にこの種の非行の増大にもつづいてゐる。しかしこれは少年問題関係者の共通な印象にとどまるもので、その明確な事象的データはまだ提示されていない。かくして、印象ではなく事実としてその発生範囲についての究明がまず必要とされるわけであるが、それがなかなかの困難であることを、執筆者たちは口を揃えていう。かつて E. H. Sutherland が指摘したように、たとえ同じ非行を犯したにせよ、中流階級はいろいろな手段、ぬけみちをもっており、下層少年の場合のように警察や裁判所の公式手続にのせられることは少なく、このようにして中流階級非行の実態は公式記録に決して忠実に反映されず、データとして使えない。公式データに頼れないということであれば、別のかたちであらたにデータをほりおこすしかない。本書の第二、三部には一般高校生をサンプルとして非行の有無を明らかにする調査が三つばかり紹介されている。

これは非行行為チェック・リストを内容とする質問紙調査で self-reporting 調査と呼ばれている。高校生のサンプルに無記名式で実施されたこの調査は、多くの一般高校生が非行少年と同様の非行を犯している事実を明らかにするのである。

### その非行の特質について

前述の高校生の調査や、第三部にのせられている中流階級青少年グループへの参与観察のデータ、家庭裁判所や少年院における公式データにもとづく分析で、下層と区別すべき中流少年非行の特質が探求されている。発表当時注目をあつめた W. W. Warrenberg の “Automobile Theft: A Favoured Group Delinquency” ものせられている。これはデトロイトの家庭裁判所ファイルにもとづく分析であるが、自動車泥棒にかんしてはよい地域のよい家庭の子が多く、下層少年には余りかかわらないことを発見したものである。しかしこれ以外のものは、そう明確な結果を示すものでないし、また中流階級非行として示されるものが、研究によつて相矛盾していたりするところもあつたりする。しかし、前述の自動車泥棒を含めて共通していえることは、たとえば窃盗にしても、ぬすんだ物の経済的利益よりは如何にうまくやったかということがその主要な関心であつたり、目的や動機が下層少年非行と全く異なると強調されていることである。自動車泥棒にしても、無断拝借で乗りまわすために行なわれる。自動車はぬすんだものを自分の所有にするのも売却するのも極めて困難であり、経済的效果があり割りに合う犯罪でなく、ゆえに下層少年の行なう

ところでない」と説明されるのである。

### 非行原因について

原因論として、第四部に五つの論文が収録されている。まず、有名な「Delinquent Boys」1955の著者A. K. Cohenは、現在の欲望満足をおさえ節約と努力の中流階級パターンが、高度生産のゆたかな現代社会の出現によって崩壊し、青少年は将来に向ってのきびしい努力への道を失うことによって現在の快楽の追求に向うからだという。次に、本書の編者Trotterは、努力するものに機会があたえられた経済拡張期においては、それに準拠して成人は子供を確実にコントロールできたが、社会・経済的条件は民生的核家族、児童中心の学校教育の出現をとめない、成人の子供に対する支配力を喪失せしめ、その結果として強力な同輩集団、ユース・カルチュアを出現せしめたこと、そしてそれらが成人社会にかかわりなく独自の運行をするところから、非行への道が開かれるという。R. W. Englandもこれと似て、労働従事も遊んで暮すことも期待されず、学校へは行くがかつてのきびしい勉学のためではなく、明確な地位も機能も再規定されないまま、多くの自由と特権を付与されつつ社会に放置されたような現在の青少年のあり方、とりわけ中流階級ではこの曖昧期間が下層階級よりも長いこと、ここに成人文化から離れた独自の若者たちの世界、ユース・カルチュアが発展され、それが非行への接点を準備するとする。W. K. Vaseous & W. B. Millerは伝統的中流階級パターンの弱体化にとめない、とりわけマス・コミを通じての下層階

級パターンの中流少年人口への上昇移動に注目し、R. H. Bohleは、現在、節約や努力の中流階級パターンによらずしてそれだけの財をなすことができること、したがって経済的には中流であっても信条、態度、行動パターンにおいては中流でないものが多く存在することに根本原因を求めようとする。

× ×

原因論を中心に本書にもとづいて考えるべき点をかいてみよう。本書では、中流階級非行はその問題行動の種類によって下層階級非行と何らかの区分ができ、また同じく窃盗であっても、その動機や目的には大きな違いがあることが主張されている。この基底に極めて強固に共通に保持されている立場は、非行は下層階級文化に連なるものであって、中流階級行動パターンと非行パターンとは相容れるものでないという考え方である。しかし前述のSutherlandが犯罪概念の再規定によって犯罪と下層階級のかたい連環をうちやぶったように、非行そのものの概念究明はかかる考え方の根本的修正に導くはずである。非行の概念はまだまだ鮮明でないし、またとりわけ現代の新しい状況において再検討する必要があるであろう。さらに中流とは何か、下流とは何か、それ自体も追究しなければならぬであろう。

中流階級少年非行の問題究明には「ユース・カルチュア」という概念が大きくクローズ・アップされている。わが国のある非行研究者は、非行とはおとなの期待にそむく子供の行為であるという。社会はおとながつくりあげ、おとなは社会の代理者である。

ユース・カルチャーの発展と強化は青少年に対する成人支配や社会的コントロールの弱体化を意味するとともに、新しい価値や行動様式の発展、既成の規準からの逸脱やそれに対する反抗ひいては非行を意味する。ユース・カルチャーがこの現代社会の必然的産物とすれば、非行は回避できないものとなる。目標を失い逸脱する青少年の発生を促進せしめているものは、こんにちの社会そのものの無目標性にあるのではなからうか。その反応形態として新しい行動様式が要求される新しい状況におきながら、社会は従来と変らぬ期待を子供たちにおしつけているのではなからうか。非行とは何であり、何を非行とするか、それにどう対処するか、社会は考えなおす必要があるのではなからうか。本書を読んで、また私にかえってくるものは非行とは何であるかという基本問題

なのである。

最後に、編集についてひとことしておく。このテーマに関連するいい論文がずい分あるだろうのに、たとえば American Sociological Review からは、それほどテーマにとって重要とも思われない論文がただ一つ、しかもそれが一九三七年号のものであったり、納得のゆかない点がある。何かの事情があるのだろうか、便宜的な寄せ集めに終っている感がないでもない。しかし、現代の問題に対応して「中流階級少年非行」というタイトルを正面におしだしたこの論文集は、それについて今後研究されるべき問題の提示としては、その意図を一応達したといえよう。(1967, HARPER & ROW) (一九六九・二稿)